

ビーコックの立場 (上)

——十五世紀中葉における宗教論争について——

松 浦 道 一

【要約】 いわゆる「地下運動」時代におけるローラード運動の具体相をとらえ、その説く教説がいかに民衆にアビールしえたかを明らかにするとともに、これに対決したビーコックの反論の内容をその名著『僧侶を余りにも批難しすぎること』の分析によつて究明し、この一五世紀中葉における宗教論争を通じて、当時の社会不満の表明と、これに対応する支配階級の動向の一端にふれる。ビーコックは当時の支配階級たるランカスター政権の代弁者としてローラード派教説に対決するのではあるが、もはや伝統的なカトリックの立場からはこれを批判しえず、新たに彼独自の「理性の判断・自然の法」を聖書に優越させることによつてローラード派を説得するほかなく、ここに彼がかえつて異端として審問されねばならぬ根拠があつた。この彼の悲劇こそは、当時の社会の相剋を反映せるものであり、彼はいわばそれに殉じた人であつたといえよう。

は し が き

ビーコックは教会側から審問されてやむなく改宗した人物として異端の殉教者とみなされてきた。この誤つた評価は、John Foxe の『殉教者列伝』(“Acts and Monuments”, ed. 1864 1. p. 805) に由来するものであり、H. Wharton

D. Waterland, Father Parsons 及び「ルターの前のルター」とみなしている。① かの J. Lewis すらウイクリフもビーコックもともにローマ教会に対決した保壁であつたとしていゝる。(“Life of Reynold Peacock”, Oct. 1820 vii) T. Short も彼を一五世紀の暗黒のなかに屹立した合理主義者、宗教改革の推進者とみなしてゐる (“A Sketch of the Hist. of the

church of England. Lond. 1840. p. 70 cit., Babington's Introd. xxiv~xxv n. 3) W. F. Hook はこれに反して、彼を極端に教会側に結びつけ、法王至上権主義者として見る。
("Lives of Archbishops of Canterbury." Lond. 1867. vol. V. pp. 178. 293~4)

ユーロマンの "the Repressor" を編輯刊行した C. Babington になつて始めて「非理性的な相手に対する敬虔な合理主義の発議者」として、ようやく公平な評価が与えられた。^③この見解はやがて J. L. Morrison になつて「中世的思考や行動になお満足しているルネサンス人」と呼ばれ ("The Book of Faith" Glasgow 1909. Introd. xxiii) E. M. Blackie が「当世の所産として後世の子」ともいふこと ("Reginald Pecock" E. H. R. July 1911. p. 448.) T. Brink が "enfant terrible of orthodoxy" といふこと ("Hist. of Eng. Literature" N. Y. 1893. II p. 336) しかしながら、彼の思想的地位については、一方において E. V. Hitchcock のように「本質的にはワリストレンスのスモラ型の思想家」であり (Introduction to the "Donet" E. E. T. S. 1921 xxii) 「彼はどの見解を真面目に抱いて

たかむかふよりは論理の練習として味わたるべき」 (W. C. Greet's Introd. to the "Reule of chrysten Religion" E. E. T. S. 1927 xvi) とし、また H. S. Bennett のように「それについても重要な人物とは目せなむ」 ("Chaucer and the 15 th century" Oxf. 1947. pp. 190~3) とする派と他方にあつて C. M. Smith のように「徹底した合理主義者」 ("Pre-Reformation England" 1939 p. 282) であり、A. Q. Myres のように「信仰と理性を調和させようとした唯一の人」 ("England in the late Middle Ages" 1952) と高く評価する派があつて、なお決定的な見解が定立してはいない。V. H. H. Green もまたその標準的な著作 ("Bishop Reginald Pecock" Camb. 1945) になつてユーロマンの史的地位についてはなお明確な結論をせしむかえてゐる。 (ibid p. 236) E. Harnick はその学位論文において、「彼の異端性は甚だしく誇大視されてゐるが、その教説の大部分は教会の正統教説以外のなにものである」 ("Reginald Pecock" Washington 1922 p. 12) のであつて、ただ「聖書の權威の上に理性のそれをおいたことにおいてのみ異端であつたにすぎなむ」 (ibid) とし、E. H. Emerson も「ユーロマンは

ほとんど完全にカトリック側のクリスチャンでありながら、同時に理性を考慮した合理主義者としては独自の思想家で『*Reginald Pecock: Christian Rationalist*』 in *Speculum* 1956 April) としてゐるにすぎない。小稿は彼の主著『僧侶を余りにも批難しすぎたこと』^①を参照しながら彼の思想史上の地位についてささやかな考察を加えたものである。

- ① Reginald Pecock: "The Repressor of overmuch Blaming of the clergy" *Rolls Series* 2 vols. 1860 vol. 1. ed. C. Babington. *Intrud.* lx.
- ② *ibid.* lix.

—

Reginald (Reynold) Pecock(1392/1395~1460/1461)はマ
 エルズの St. David 教区内に生まれらしいが、その前半
 生については不明な点が多い^①。彼は皮膚病にかかったけれ
 ども、美しい威厳にみちた風貌をもち、虚栄心・自負心が
 強く^②、得意の三段論法によつて常に出しやばつて発言、説
 教、著作を行つたが、その性格には多くの矛盾や欠点があ

り、^③ある意味では人間的な片鱗を見出すことができよう。
 なお彼の親友で後に Norwich 司教になつた Walter
 Lyhart が Cornwall の Lanteglos 出身の水車屋の子であ
 つたことから、彼もまた決して富裕な階級の出身ではな
 かつたであろう^④。

彼の生涯において注目されるのは、オックスフォード
 Oriel College に学び(一四〇九年入学、一四一三年 B.A.)ウイ
 リフの教説やロラード派の説教に大きな影響をうけたこと
 および D. D. のコースにおいてその学識を認められ、グロ
 スター公 Humphrey の知遇をえたことがあげられる。事
 実グロスター公の庇護により彼は間もなくグロスター派
 St. Michael in Riola の司祭職俵をえてロンドンの
 Whittington 半長に補され^⑤、さらに間もなく D. D. をえて
 St. Asaph の司教に任ぜられる^⑥。しかし、当時は百年戦争
 は不利であり、ランカスター朝の財政困難は対仏外交政策
 を軟弱にし、有力に擡頭しつつあつた地主・ブルジョアジ
 ーは極めて不満であつた。そしてノルマンディーの喪失、ジ
 ャック・ケードの乱にみるようにランカスター体制の矛盾
 はおおいがたく、^⑦ようやくヨーク政権への動きが現われつ

つあつた。^⑩にもかかわらず、グロスター公の死後もピーコックはサフォーク伯に庇護され、一四五〇年には Chichester 司教に任ぜられているのである。^⑪

さてこの間、彼は国王に請願して110 税や115 税の免除を申請せねばならず、教区内には不在であり、ロンドンにあつて執筆を続けていた。この教区内不在と St. Paul's Cross における有名な説教によつて彼の失脚の第一歩が印される^⑫ことが注目される。すなわち、一四四七年のこの説教において司教は説教しないことを責めらるべきでなく、その教区内の監督や議会・聖職者会議における忠告者として遂行すべき困難な仕事があることを立証しよう^⑬と試みたのであり、彼はこの説教によつて司教の悪口をいうものはない^⑭なるだろうと考へたのであるが、かえつて人々は強い反感をもつに至り、とくにロラード派は激しい反対を表明するのである。^⑮とくに国王は間もなく書簡をオックスフォードに送り、John Harlow はピーコック説の支持者である故 D. D. を認めるべきでない^⑯と要請している。このようなまき起る反対のゆゑに、カンタベリー大司教 John Stafford はピーコックに弁明を要求し、これにこたえて彼は

“Appreviatio Reginaldi Pecock”^⑰を執筆している。その概要を示せば、次のごとくである。(1) 司教がその職責によつて一般人に説教する義務があるとは証明できない。(2) 司教は自らを束縛して考へるべきではない。(3) 司教は下級僧侶よりもより多くの知識をもてるはずである。(4) 司教はそのより高い義務が邪魔されぬ限り、説教など下級僧侶の機能を自由に果して差支えない。(5) 色々な理由によつて司教はその教区内に居住することから免除される。

(6) 司教は単なる説教よりも以上に重大な義務をもっている。(7) 法王による司教職の叙任も初収入料の支払も聖職売買にはならない。^⑱この弁護は高僧たちに支持されたと思われるが、しかし彼によつて投ぜられた波紋は決しておさまつたのではなく、^⑲ランカスター政権の動搖・ヨーク派の擡頭とともにそれはふたたび動くのである。

彼がその主著 “Repressor” を完成したのは、一四四九年であるが、ヨーク派の人々がランカスター朝と結合しているピーコックを攻撃するのは一四五七年である。すなわち、一四五七年一〇月二日ウエストミンスターで国王評議会が開かれた時、ヨーク派のロンドン市長 Cannynge が彼の

著作になる宗教冊子のなかに問題をはらむ章句を発見し、これを会議に提出したのを機とし、大司教 Boucher はヨーク派と結んで審問を開始する。これに対し、ビーコックは大司教は過去三カ年間に彼が書いた本を検討すべきであり、それ以前に書いた本は知友間に流布したものであり、自分の最終的な訂正を受けていないから責任はもてないことを明らかにした。大司教は一月一日にその著書を所持してランベスに出頭するよう命じたので、彼はその著作の語句の修正に没頭した後、“Repressor” “Book of Faith” “Done” をふくむ九冊の本をたずさえてランベスに出頭し、大司教以下二四人の D.D. の審問をうけたのである。このなかに St. Aeph の前任者であったロチェスター司教や『ソロモンの剣』の筆者であった彼の論敵 Bury やヨーク派であるリンカン司教 John Chedworth など、がいて彼に利は不であつた。審問会は彼に撤回すべき七点を示し、翌二二日にも再審問を行っている。こうして彼は二月三日(土)大司教の面前で転向を誓い、翌日 St. Paul's Cross で二万人の人々を前に公式な誓絶をしたのである。問題の七カ条とは次の如くである。

(1) わが主、イエス・キリストが死後地獄におちたと信ずることは救済に必要でない。

(2) 聖霊を信ずることは救済に必要でない。

(3) 聖カトリック教会を信ずることは救済に必要でない。

(4) 聖餐を信ずることは救済に必要でない。

(5) 普遍教会も信仰について誤りを犯すことがある。

(6) 普遍教会の一般集會が信仰上また救済のために決定し、賛同し、規定したことは、キリストに忠実な人々の凡てにより保持され、認めねばならぬし、カトリックの信仰や善行に反対であると批難することが許しがないと信ずることは救済に必要でない。

(7) 誰でも聖書を文字通りに解することは全く合法的であり、他のどんな意味を固執することも救済のために必要であると主張するべきではない。

「もし私が自分の見解を弁護するならば、焚刑に処せられねばならぬ。もしそうしないなら私は突草になるだろう。しかし人々から罵言されても信仰を放棄し、地獄に至るよりはよい。それゆえ私は誓絶することを選び、余生は疑が起らぬように生きたい。」と答えている。「聖なる三位一体の名において私は私自身の自由意志で、いかなる人の強制にもよらず、次のことを告白し、宣言する。私はかつて聖書や

聖教会が決定したことよりも、自然理性の判断によるべきことを唱え……真のカトリック信仰に反して危険にして、有害な教説、著作を公にしたが、そのなかには聖教会の決定やカトリック信仰に反する異端と誤謬をふくんでいたことを認めるものである。云々^④。こうして彼は自らその著作になる二つ折本三冊と四つ折本一冊を火中に投じたのであつた。思うに審問をうけること自体彼にとつてはむしろ心外であつたに相違ない。何とならば彼自身は教会を守ろうとしたのであつて、異端とされることに耐えられなかつたからである。ピーコックの罪科の決定は延期され、まずカンタベリーついでメードストーンに送られた。この間、彼は免罪と復職を望み、法王 Calixtus III に請願している。それは好意的に受けとられ、法王はその破門と処罰を中止するように Ely 司教 John Stokes に指示している^⑤。しかしこれに対し、彼を審問した人々は法王が Pius II にかわるや、彼の行為は正しくかの Praemunitive 律に違反するものであると国王ハンリー六世に訴えた。国王も異端と宣告された者を司教職にとどめることはできなからし、法王に実情を訴え、その職祿を剥奪することは当然であると告

げている^⑥。そして国王は John Derby と Gilbert Haycock を彼のところに派し相当な年金を与えることを約して辞職を迫り、もし法王に訴願すれば、極刑をもつて臨むであろうと脅迫している。ピーコックが辞職したのは恐らくこのようにしてであり、しかも彼の敵手たちはそれに満足せず、彼を Peterborough 附近の Thorney 僧院に送り、密閉した部屋のなかに幽閉したのであつた。大司教の僧院長に対する指示によれば、みさを聞く祭壇とみさの本、さんび歌、聖書以外は与えられず、書く材料も与えられなかつた。こうして彼は、一四六〇年ごろ恐らくは六六歳でその生涯を閉じたのである。彼の数多くの著作はほとんど失われ、彼自身もやがて人々から忘れられ、その影響も一六世紀にはほとんど見られず、さきにもべたような誤解を生んだのである^⑦。

④ わずかに彼の論敵 Thomas Gascoigne を John Whethamstede の言辭から推定しようとするが可い。(E. F. Jacob; *Reynold Pecock, Bishop of Chichester. Proceedings from the British Academy* vol. xxxii Lond. 1951 p. 124) 又彼の "Liber Libere veritatum" の "Dictionarium" にも見られる。(J. Gairner; *Lollardy and the Ref. in England. An Historical Survey*, vol. 1. 1908 Lond. p. 243)

- ⑧ "Repressor" vol. ii pp. 554~61 Gascoigne; "Loei e'Libro Veritatum" ed. by E. T. Rogers oxf. 1881. p. 29 cit., H. H. Green; op. cit. p. 70.
- ⑨ Gairdner; op. cit. vol. 1. p. 238.
- ⑩ "Repressor" vol. 1. pp. 15~17 p. 128 その言辭は時として尊大に失し、とくに國王に對する非礼の言はその失脚を早めたい因と思われぬ。(Cf. *ibid.* p. 22)
- ⑪ Babington's Introd. 1~11, ⑨ *ibid.* lix.
- ⑫ Green; op. cit. p. 8 n. 4.
- ⑬ 一四〇七年十一月、Arundel 大司教はオックスフォードで聖者會議を開き、許可なくしてマイタクリンおよびその派の著作を職使用することを禁じた。(H. B. Workman: John Wyclif. 1926 vol. ii: pp. 417~9 App. V) さらに大司教は大學を訪問しようとしたが、とくにローマ派の多かつた Oriel college は大司教に對してその扉を閉じた。このため同カレッジの学生監 John Birch を William Simon らは告発され、大學は一時禁制下におかれ、同カレッジの部長 John Kote はローマ派であるところうけんをせうけた。(Rashdall; H. of Universities in the Middle Ages ed. by Powicke and Emden vol. iii: p. 132. n.)
- ⑭ ボーロックは丁度このようなく、すなわき一四一四一五年に Oriel college の fellow になつたひまより、やがてつかの Oldcastle の乱が起る。また當時かの Thomas Gascoigne も同カレッジに學んでゐたのである。(Green; op. cit. pp. 13~5)
- ⑮ K. H. Vickers; Hemphrey, Duke of Gloucester 1907 p.

387. cit., Green; op. cit. pp. 20~1. 實に Oriel College はランカスター派司教の出身校の觀を呈したのである。(Jacob; op. cit. p. 126)
- ⑯ 1431. 7. 19 Hitchcock's Introd. xix.
- ⑰ Babington's Introd. xiii なお彼がその著作を完成するのは、實にこの時期(一四四四年)であり、その思想が体系づけられたのもこのころであつた。(Jacob; op. cit. p. 127)
- ⑱ とりあはず、拙稿「ジャック・ケードの乱に關して」『世界史研究』第十一号参照。
- ⑲ ロラードの徒が多くヨーク派の地盤に輩出していたことに注意。拙稿「ロラード運動の一考察」『西洋史學』第二八輯参照。
- ⑳ 一四五〇年三月二三日、Babington が六月九日としてゐるの誤りである。(Green; op. cit. p. 42. n. 1) なお當時の政情に關しては前掲拙稿㉑参照。
- ㉑ Cal. Pat. Rolls 1441~6 p. 348. cit., Jacob; op. cit. p. 131. サフォーク派は教會に有力なメンバーを送ることに努め、ボーロックも宮廷と關係をもつに至つたと考えられる。なお、彼はサフォーク派として反戦派であり、対フランス戦に強い反對を表明してゐる。("Repressor" 1. p. 90)
- ㉒ Hitchcock's Introd. xx.
- ㉓ "Repressor" 1. p. 88. ボーロックがこの説教を行つた動機は、當時説教をしない教区内不在司教に對して不利な噂が起つており、また司教のなかには良心的に迷つてゐるものもいたし、今や司教の本務が明らかになるべきであると考へたからであつ

た。なお説教それ自体を決して彼は排除する意図がなかつたことは注釈ければならぬ。(“Repressor” ii p. 618)

② G. R. Owst; *preaching in Medieval England*. Camb. 1926 p. 42.

③ 被戒僧や不在僧や説教をこなす僧侶に對しては「税を支拂ふ必要はなかつたプロテニス派の Swinberby の説を起程やす。(Owst; *ibid.* p. 126) またジャマン・カーニの説はむしろ不識のなかに説教に於ける説教の無視ならぬと云ふに注目したる。

④ Jacob; *op. cit.* p. 150.

⑤ “Repressor”, vol. ii App. pp. 614~9.

⑥ *ibid.* 44 R. Weiss; *Humanism in England during the 15th Century* 1952 ed. pp. 76~7 參照。

⑦ Gairdner; *op. cit.* vol. 1. pp. 203~4

⑧ “Repressor” ii. p. 516. 百年戦争が再開されたから三四年經つては、ウスターの計算するより十四九年にならぬと云ふ。(Green; *op. cit.* p. 38 n. 4)

⑨ T. G. Jallard 著の 英王リチャードの死を譯して リチャードの死 (“The Church and Papacy” 1944 p. 420 n) に、リチャードの死を譯して リチャードの死 (Green; *op. cit.* p. 49. Greet’s *Introd.* xvii A. M. Cooke; “peacock” in D. N. B. vol. xv pp. 643~7)

⑩ Gascoigne; *op. cit.* pp. 378~80. *cit.*, Gairdner; *op. cit.* vol. 1. 229, A. D. Greenwood; *The Camb. Hist. of Eng.*

Literature vol ii pp. 281~91.

⑪ Babington’s *Introd.* xxii n. 1.

⑫ Hitchcock’s *Introd.* xxiii.

⑬ *ibid.* xviii.

⑭ Jacob; *op. cit.* p. 132.

⑮ Babington’s *Introd.* xlv. Hitchcock’s *Introd.* xxiii~xxiv

⑯ Babington’s *Introd.* xxxix. D. Wilkins; *Coniilia magna Britanniae* vol. iii p. 576 Lond. 1737. *cit.*, Green *op. cit.*

pp. 59~60. Gairdner; *op. cit.* vol. 1. pp. 235~6.

⑰ G. G. Coulton; *Social Life in Britain from the Conquest to the Reformation* 1956 Camb p. 268.

⑱ Gascoigne; *op. cit.* pp. 548~9. Whethawstede; pp. 495~500 *cit.*, Babington *Introd.* xlvii~xlix.

⑲ Cal. Papal Lett. ix 77~8, 178. (1458. 6. 27th) *cit.*, Cooke; *op. cit.* xlv p. 201.

⑳ 譯題「ヤキリス宗教改革の前後」『西洋史学』第四四輯參照。

㉑ Cal. Papal Lett. xi 629. (1459. 4. 7th) *cit.*, Green; *op. cit.* p. 64.

㉒ Jacob; *op. cit.* pp. 139~40. Babington’s *Introd.* lii~lii.

㉓ Babington’s *Introd.* liii.

㉔ 本題「リチャード」參照。

ビーコックが“Repressor”を執筆した当時におけるローラード運動は、グリーンという第三期地下運動の時期であり、^①東南部地方の職人仲間を中心にいわゆるローラード聖書やウイクリフの“Wicket”という化体説否定の通俗論文^②を読み、「聖書人」(“Biblemen, “Known men”)または「世俗派」(“U. Pay arty”)として民衆の間に親しまれていた。^③一般にウイクリフの教説は四つの異つた社会層に滲透していつたのであつて、(1) オックスフォード大学を中心とするアカデミックなサークル、(2) 富の配分にあずかろうとして教会財産没収に賛同したナイト層、(3) 同じく新興商人、市民層、(4) 解体期の社会において何らかの新たな世界観をえたいとするめざめつた民衆、これである。しかし、このうち (1) (2) (3) はかの異端者焚刑令や聖職者会律(1409. Act of Convocation)によつて、さむには Oldcastle の乱(1414~7)や Jack Sharpe の乱(一四三一年)の壊滅以後は、ほとんど離脱していつたのであり、わがビーコックの時代には、(4)のみが残存していたのである。当時にあつては現実社会に対する不満ないし攻撃は、しばしば宗教的異端というかたちをとるのであり、ローラード派の名

のもとにあらゆる社会的不満が現われていたといえよう。^④さて、勿論われわれはこのような地下運動の全貌を明らかにすることはできないのではあるが、事件として記録されたものをできるだけとつてみよう。

一四一九年の聖職者会議の記録からは、魔術を行つて異端に問われた Richard Walker、異端たることを認め誓絶した教悔師 Ralph Ovrede や William Browne の例が^⑤みられ、一四二〇年には当時著名なローラードの徒であつた William James が転向している。^⑥一四二二年にはすでに異端として告発されていた William Taylor がしばしば誓絶しながらもなお依然としてカトリックの教義に反して、人々と交遊し、焚刑に処せられている。^⑦一四二四年にはスタムフォードの托鉢僧で英語で「誤れる結論」を述べ、その取消を命ぜられた John Russell^⑧および使徒書簡の偽造を告白して誓絶した John Watne の例が見られる。著名なのは一四二五年の聖職者会議で告発された William Russell の場合であろう。彼は多年ローラードの徒としてけんぎをうけ、^⑨10 税に反対して誓絶を余儀なくされたにもかかわらず、召喚を無視してローマに至り、投獄されるや牢を破つて逃亡し

て行方不明となつた。一四二八年には異端の本を所持して
いた John Joundelay^⑭、聖餐式・偶像崇拜・巡礼などに反対し、
審問から逃げかくれた Katharine Derford^⑮、誤謬と異端
のところが投獄され、四日間にもわたるきびしい審問に屈して
ようやく誓絶した Robert 某^⑯、英訳聖書をもち、ロラード
の秘密集会を開らうとした William Harvey of Tenderden^⑰
英語で書かれた “Book of the new Law” という本を所
持し、異端の疑の濃く John Calle^⑱、異端の容疑で逮捕さ
れた Richard Monk など、いずれも聖職者会議に召喚され
て誓絶している。一四二九年には William Curayn という、
プリストル市民が五度目にようやく誓絶している。一四三
〇年にはロンドンの羊毛梱包人 Richard Hounden が頑強
に誓絶を拒んで焚刑に処せられ、一四三一年には Essex
の Manewden の教区牧師であつた Thomas Bagley が殉
教している。同じ一四三一年にはこのような個別的な活動
を組織化した、かの Jack Sharpe の乱が起つてゐる。「こ
の Abingdon における異端の集合」はらわゆる “a meyne
of risers” を形成し、かつてロラードの徒によつて起され
た教会財産没収運動の再版であり、富裕な教会や高僧の財

産を没収してこれを下級僧侶や貧民に再分配しようとする
プログラムをもち、その案文をロンドン・コウェントリ、オ
ックスフォード地方にばらまき、一時大いに気脈を通じあ
つた。このプログラムの指導者の本名は William Moun-
devyle であつたが、この陰謀の首領としては Jack Sharpe
of Wigmoreland で通つてゐた。この陰謀は間もなく洩れ、
一味は Abingdon やオックスフォードで逮捕され、首領 Sh-
arpe も一味とともに焚刑に処せられた。この乱において
注目すべきは、筆工、画工、製本工などが多く加担してい
て、ロラードの徒の間に読書人らしいものが増大しつづあ
ることを想定しうることであらう。

次に、比較的に史的にその主張内容や経緯が明らかな
二、三の例について見よう。

[A] Margery Backster ノフォーク州 Marham の大工
の妻で、一四二八年異端として告発されたが、彼女に対する
異端簡条は次の如くである。

(1) 神・マリア・聖者によるに非されば、聖職者はあたかも蜂
のように信者の皮膚を刺し、心を毒するにすぎない。

(2) 教会内の偶像に跪き、祈ることは悪である。

(3) もし教会内のすべての聖体が神であり、クリストの身体であるとせば、無限に多くの神が存在することになる。教会内のそれは人々を偶像崇拜に誘うものにすぎない。

(4) 人々が聖トマスとよんでいる Thomas of Canterbury は偽善者である。何とならば彼は多くの財産を教会に寄進させたからである。

(5) 神の法の真の説教者であつた William white や John Wadden など真に神に仕えた人々に迫害を加えた者に対しては神罰が下るのであろう。

(6) 各人が定まつた日時に肉や魚を食べることは決して不当ではない。

(7) 異端として批難された White は善良にして重なる人である。

(8) 彼女は夫が夜ごとに彼女のために読んでくれた本の内容を聞くことを望んだ。⁽⁴⁾

[B] Ralph Mungyn 二〇カ年以上も異端としての悪名高く、四カ月間入牢してもなお屈しなかつた彼に対する異端一六カ条をみよう。

(1) 彼は一時オックスフォード Edmund's Hall の副司祭であり、ボヘミアに逃れてフシテン運動に参加した Peter Clarke

(Peter Payne ともいう) の知友である。

(2) 彼はこの Peter Clarke が異端者として悪名高い人物であることを認めた。

(3) このことをよく知りながら、彼はこの男に帰依し、深い交渉をもつた。

(4) ウィクリフの英語の本を所持し、かつそれを知友に与えた。また "Trilogus" と "Evangelia" を所持し、これらをハムプシャーの礼拝堂牧師 John Botte に売却した。

(5) これらの本が異端的の見解をふくんでいることをよく知つていた。

(6) オックスフォード大学やロンドン市などで各地の男女とこのような教説・著作を交換し、また教示した。

(7) 二〇カ年以上もロラード派として疑われてきた。

(8) 数回各地区の司教に召喚され、信仰について弁明した。

(9) ロラードの疑で名だたる Bartholomew Commonger を訪問した。

(10) ロラードの徒と疑われていた Richard Monk に近すぎ交渉をもつた。

(11) かつて Oldcastle の召使であつた Hoper という男と交際した。

(12) ロンドン市民でロラードの疑のあつた Shadworth という人の教悔師 Thomas Garenter と極めて親密であつた。

(13) Shadworth の家でホーミア人と戦ふことは不当であり、すべての物は共有であるべきであり、私有財産はもつべきでないと公然と言明した。

(14) あれこれ極めて異論の容疑が濃い。

(15) 上述の理由から少くとも誓絶せねばならぬのに、これらの容疑は真相を語つていないと主張した。

(16) 尋問されるや誓絶を拒否した。^⑤

[C] Richard Wyche 彼は度重なる審問によつて一時誓絶し極刑を免れたが、牢獄から釈放されぬまま一四四〇年まで入牢していた。そしていかなる説得も彼の根本的立場を变革しえないことが明らかとなつたので、遂に一四四〇年六月一七日その下僕とともに焚刑に処せられた。ホーミア人によつて書かれた “Gesta cum Richardo Wycz presbytero Anglia” によれば、彼に対する異端・誤謬一四カ条は次のごとくである。

- (1) 偶像崇拜をしてはならない。
- (2) 神と偶像とは関係がない。
- (3) 人は悪徳の僧侶にざんげをすべきではなく、善行のざんげ

僧を選ぶべきである。

(4) 人は全福音書を知るべきであり、知つたからには祈るべきである。

(5) 人はその内容を知るために自國語で祈るべきである。

(6) 各僧侶は自己の最善をつくして聖書を理解すべきであり、また説教する義務がある。

(7) エルサレムやローマに行くことは無駄なることである。

(8) 巡礼に行く男女は常に聖書をその会話の主題とすべきである。^⑥

(9) 僧侶は物乞いしてはならない。

(10) 施与は老人・弱者・病人にのみ与えられるべきである。

(11) クリストの死刑に処せられた十字架は崇拜されるべきではない。^⑦

(12) 説教は場所のいかんを問わずなざるべきである。

(13) 人を焚刑に処する者は不法を行う者である。

(14) Richard Wyche が誤つているという者こそ愚者である。^⑧

これらの諸例にみるように、ロラードの徒は確乎たる信念を抱いていたこと、聖書に依拠して相当の知識をもつていたこと、秘密の連絡や交渉をしていたこと、民衆の間に

入つて非常な信頼と尊敬をえていたこと、総じてレヒラーやガーディナー説にもかかわらず、その感化・影響するところまことに無視できぬものがあつた。そして、それはわがピーコック自身も認めるところでもあつたのである。當時におけるローラード運動の分布は、上述した徒輩の出身地または活動地を集計しても明らかなように、Lincoln, Norfolk, Suffolk, Essex, Buckingham, Middlesex, Somersetの名前、とくに Norfolk 州を中心とする東南部一帯の職人層の間において盛んであつた。すでにスタンプスやロジャースが指摘しているように「ローラードの徒は多くヨーク家の勢力地盤に輩出して」いたのである。けだし、すでにヘンゲルスが指摘しているように、ランカスター政権は崩壊に瀕した封建領主、とりわけウエルズや北部地方に大領地を有する大封建領主の利害を代表していたのに対し、ヨーク政権は封建的危機のなかに生長した中産階級とくに東南部の市民層に支持されていたからである。ここにわれわれはわがピーコックがウエルズ人であり、グロスター公やサフォーク伯の庇護をうけたこと、および彼がローラード運動に力強く対決するにいたつた背景を理解できるのである。

- ① Green は第一期 academic phase Ⅱ オックスフォード大学中心、第二期 political phase Ⅲ Oldcastle の乱中心、第三期 Underground Movement (1417年以降) と分ちつてゐる。(Green; *The Later Plantagenets* Lond. 1955 pp. 201~9) 42 43 44 ノーブル運動一般については前掲書籍①②を参照。
- ② M. Deanesly; *The Significance of the Lollard Bible* 1951
- ③ H. O. Taylor; *Thought and Expression in the 16th Century* 1920 vol. ii pp. 39~40. Gairdner; op. cit. vol. ii. p. 118.
- ④ R. H. Hilton and H. Fagan; *The Eng. Rising of 1381* 1950 p. 75. Gairdner; op. cit. vol. I. pp. 61~3, 118.
- ⑤ E. Troeltsch; *Social Teaching of Christian Church* vol. I. p. 362. Hilton and Fagan; op. cit. p. 71.
- ⑥ "Fasciuli Zizaniorum" ed. by W. W. Shirley, *Roll Series* 1858. *Intrud.* lxxviii.
- ⑦ Wilkins iii 394~5 cit., Gairdner; vol. I. pp. 125~6.
- ⑧ *ibid.* 397 cit., Gairdner; *ibid.* p. 127.
- ⑨ *ibid.* 404~13 cit., *ibid.* pp. 127~9.
- ⑩ *ibid.* 428~9 cit., *ibid.* pp. 130~1.
- ⑪ *ibid.* 434~59 cit., *ibid.* pp. 132~4.
- ⑫ Gairdner; op. cit. vol. I. p. 145.
- ⑬ *ibid.* pp. 145~6.
- ⑭ Wilkins iii 393~4 cit., *ibid.* pp. 146~7.
- ⑮ Gairdner; *ibid.* p. 147.
- ⑯ Wilkins iii 494 cit., *ibid.* p. 147.

① Gairdner: *ibid.* pp. 148~9.

② Hunt's Somerset Diocese 143 *cit.*, Gairdner: *ibid.* p. 161. n. 2.

③ Gairdner: *ibid.* p. 159. ④ *ibid.* pp. 159~60.

⑤ 一四一〇年議定に對してなされた提案は「教会財産没収に於て十五人の伯(一五〇〇人)のナマケ(二〇〇〇人の)郷紳をその一〇〇の施療院を其かなうこと及びあるを訴へしむた(Rot. parl. iii 625. 645. *cit.*, Gairdner: *op. cit.* vol. 1. pp. 63~4.)」との條がこれと同様の趣旨が述べられてゐる。

⑥ Gairdner: *op. cit.* vol. 1. pp. 160~1.

⑦ E. F. Jacob: *Henry V and the Invasion of France 1947* pp. 46~7. 52.

⑧ "Social Life in Britain from the Conquest to the Reformation" compiled by G. G. Coulton. 1956ed. pp. 462~5

⑨ Gairdner: *op. cit.* vol. 1. pp. 148~154.

⑩ Shirley. *op. cit.* pp. 501~5. E. H. R. V. p. 531~41. Gairdner: *op. cit.* pp. 126. 171~185.

なお Richard Wycbe が焚刑に処せられるや異常なせんやーモンが人々の間に起つた。何とならば彼の名は広く知られており、彼を聖者と考へた人々が多かつたからである。多くの男女が彼の処刑された場所に出かけ、聖者に對するやうに跪いて祈りをささげ、貨幣や供物をそなへて大地に接吻し、その遺骸として灰を持ち帰つた。八日間もそれが続いたのでロンドン市長は武裝兵を派して日夜これを制止せねばならなかつた。遂に國王は一四四〇年七月十五日各州長に命令を發し、異端として

処刑された者の遺骸に巡禮し、供物をささげりたる不法行為を禁止する(⑩ Foxe iii 703 *cit.*, Gairdner: *op. cit.* vol. 1. pp. 171~2)

⑪ G. Lechler: *Johann von Wiclif u. die Vorgeschichte der Reformation Leipzig 1873 Bd II. S. 348.* G. Gairdner: *op. cit.* vol. 1. p. 161. なお一四三一年の Jack Sharpe の亂以後マニーヤ運動は事実上消滅し、ただローマに對する反感が残つたにすぎぬと主張したのがあるが、その後の研究によつては、それはその底流として存続してつたことが認められてゐる。(G. Constant; *The Reformation in England.* vol. 1. 1939. p. 13 n. 45. P. Hughes. *The Reformation in England* vol. 1. 1952. p. 464.) なおこの時期に擧げられた(⑫參照)

⑫ Green: *op. cit.* p. 103 n. 1.

⑬ 例へば "Repressor" 1. pp. 86~7.

⑭ Foxe iii pp. 580~90 *cit.*, Green: p. 100 n. 3. 4. G. M. Trevelyan: *England in the Age of Wycliffe 1929 ed.* 藝文地圖を參照せよ。

⑮ Stubbs: *Const. Hist. of England.* iii p. 393. Th. Rogers: *Centuries of Work and Wages 1923 ed.* pp. 344~5.

⑯ エンゲルス『ドイツ農民戦争』岩波文庫版七五頁註④、なお一三四一五頁註①參照。なおこの點については W. H. Haward: "Economic Aspects of the War of Roses in East Anglia" in E. H. R. 1926 April p.p. 170~89. を參照せよ。

III

すむ) Hoccleve の註 (“Minor Poems” ed. by F. J. Furniville E. E. T. S. 1892) 及び J. Cunningham の論文 (“Determinations” in Fasciculi Zizaniorum p.p. 3~103) J. Tissonigton の論文 (ibid. pp. 138ff) B. Wells の論文 (ibid. pp. 239~41) などにもみよふように、反ロラードの叫びはあげられていたが、^①いずれも注目しに値するほど重要なものではない。Hoccleve の詩は、信仰と理性を対照させつつ教会の權威を強調して国民的な感情に訴えているが、その他の上述の論文はいずれも聖書から引用された原文の解釈についてのスコラの論議に終始している。^②比較的優れたものとして、Roger Dymok の “Liber Cotha XII Errores et Hereses Lollariorum” や Netter of Walden の “Doctorinale” があるが、いずれも全面的な批判や満足すべき解答をなしているとはいえない。

Dymok (c 1351~1418) はドミニカ派の神学者で、この著作は一三九五の議会におけるロラードの徒の請願一二カ条^③に対して論議しているがゆえにこの名がある。彼は教

会を防衛することが国王の義務であるとし、教会財産没収に反対し、そこから逐次反論を加えている。その議論は明確であるけれども哲学的、神学的前提は勿論、体系的、組織的論議にも欠けているといわねばならない。^④Thomas Netter (c 1376~1430) は優れた教会人であり、聖書の研究にもぬきんでたオックスフォードの学徒でもあり、またヘンリー五世のさんげ僧であつた。彼は教会側正統派の熱烈な弁護者であり、Oldcastle, Taylor, white の審問にも協力している。この著作は時の法王マルティヌスVに献呈されて、「海に大嵐が吹き、そのために聖ペテロのボートは異端と誤謬の波とのはげしい闘いを続けている」と述べている。ロラード派の議論は、クリストの信仰を二つに切り、その半分を受け入れているにすぎない。何とならばウィクリフは聖書の信仰を認めたが、クリスト教会の信仰を無視しているとし、例えば Oldcastle はウィクリフの福音の名のもとに全教会秩序を破壊するような叛乱を起したと訴えている。そして聖書に依拠することこそ信仰の唯一の基礎と考えるロラード派に全力をあげて反対し、教会こそあらゆる疑惑に結末を与える權威をもつものであること、聖書

以外に教父の言を考へることが必要であると力説する。そしてクリストが天に在るのに対し、法王が地上に在ることの必要性を明証し、法王の権威、樞密卿、大司教、司教の権能を論述し、さらにウイクリフが“Caim”とよんだ四僧團 Carmelites, Augustinians, Jacobites, Minorites の存在の意義を明らかにする。さらにロラードの單純性の主張からする學識の不必要説は、その無智から来るものにならざるべし、中世教會の統一性とその組織の優秀性を明らかにする。それは Dymok のそれよりもはるかに首尾一貫しているが、ピーコックのものに比べるときはなお十分なものとはいえないのである。^⑥

この間にあつてピーコックの『僧侶を余りにも批難しむべきなること』は彼独自の論理的説得により全面的、体系的にロラード派をおさえようとするものであり、彼の畢生の結晶として重要な意義をもつものであつたといわねばならない。^⑦この書が執筆されたのは一四四九年であると推定されるが、それが発表されたのは恐らく六年後(一四五五年)であつたらしく、^⑧原名は“The Repressing of over mych wyng of the Clergie”であつたが、後世の手写により、

“The Repressor of over myche blaming of the clergy”と書かれたのである。^⑨彼はオックスフォード大学における見聞をもととして、ロラード派の論文「ロラードのための弁明」(“Apology for the Lollards” ed. by J. H. Todd. Camden soc. Lond. 1842) や「教會内のローマ的腐敗に対する諫言」(“Remonstrance against Romish Corruptions in the Clwrech” ed. by J. H. Forshall 1851) に対して直接解答することともにロラード派をその理性の優位を論拠として説得し、世俗人の信仰の基礎を培い、僧侶には「聖書人」の反論に答へるべき明証を与えようとしたのである。

① その他は Rasdall; op. cit. I. p. 247 参照。

② Green; op. cit. p. 103~4.

③ うれにぐては別稿にゆずる。とりあへず H. S. Cronin; “The 12 Conclusions of the Lollards” in E. H. R. April 1907 pp. 292~304 参照。

④ Green; op. cit. pp. 104~6.

⑤ Gardner; op. cit.; vol I. pp. 186~201. Green; op. cit. pp. 106~7. なお Netter のみるところによれば、ロラード派の教義は次の一〇カ条に要約しようとする。

(1) 法王や教會は聖書から証明をわむに非ざれば、非難せらるべきものである。

(2) 聖書は信仰の唯一の源泉であり、聖職者會議が決定した

ことは尊重に値しない。

(3) 聖博士の教説は尊重に値しないばかりでなく、その註解は拒否されるべきものである。

(4) ロラードの徒は司教や聖教会徒よりもはるかに学識があるとみせている。

(5) 聖教会の博士たちは、ウィクリフの教説を理解してはいない。

(6) 彼らはウィクリフの本を賞めたたえ、聖教会徒にも読むことをすすめている。

(7) 彼らは聖者を教え、巧妙に単純な人々の心をとらえている。

(8) 彼らはその人生観によつて人々をそそのかし、人々の言行を自らの方に適合させている。

(9) 彼らはウィクリフの言を人々が理解しないといつているが、実は彼らこそウィクリフの言わなかつたことを述べ、またいい加減に引用している。

(10) 彼らはウィクリフはその死の前に若干その言を取消し、

変更したとしてゐる。

これを後述のピーコックの論点と比較対照すると興味ぶかい。(Gardner, *ibid*)

⑨ Trevelyan: *op. cit.* 1929 ed. p. 345, なおレヒラーは告白している。「私は一八四〇年の夏ケンブリッジ大学図書館でピーコックの“Repressor”を研究してロラードの歴史に興味をいだき、それからウィクリフの研究に向つたのである」と。(Green: *op. cit.* p. 107. n.)

⑩ “Repressor” II. pp. 516~7. Hitchcock's *Introd.*: xxii. Babington's *Introd.*, xxii n. 1.

⑪ Krapp: *The Rise of Eng. Literary Prose* 1915 p. 69. Babington's *Introd.*, lxii.

⑫ ピーコックは一度しかロラードの論文に言及していない (“Repressor” I. pp. 501) が、それはここにあげた二論文を指しづらふと思われる。(Babington's *Introd.* xxvi~xxviii esp. n. 3. 参照)

(未完)

吳玠, who was an officer of *Chang-chün's* command with a weak power in '31, between '33 and '36, grew to grasp the military and financial power which *Chang-chün* had in '39 to hold eighty thousand soldiers and forty million *min* 緡 revenue a year; this rapid development was due not only to his personal talent, but to the readjustment policy by the *Nan-sung* dynasty.

Peacock's Standpoint

—religious controversy in the middle of the fifteenth century—

by

Michikazu Matsuura

This article explains the then expression of social discontent and a corresponding trend of the ruling class, through the religious controversy in the middle fifteenth century, by taking the concrete aspects of the Lollards movement in the so-called "underground movement" period, explaining how their teaching appealed to common people, and examining the Peacock's objection from analysis of his book "Not to over-condemn the priests."

Peacock stood against the Lollards teaching as a spokesman of the Lancaster administration, the then ruling class, and he could no longer criticise it from the traditional catholic standpoint, having no choice but to persuade the Lollards sect by making his own thesis 'judgement of reason' and 'law of nature' superior to the Bible, by which he had to be tried as a heretic.

His tragedy reflected the difficulties of the then society, of which he was a victim.